

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	「帥大伴卿歌五首」の趣向と作意
Sub Title	
Author	胡, 志昂(Ko, Shiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1990
Jtitle	三田國文 No.13 (1990. 6) ,p.17- 25
JaLC DOI	10.14991/002.19900600-0017
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19900600-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「帥大伴卿歌五首」の趣向と作意

胡 志 昂

一 はじめに

万葉集卷三雜歌の部に筑紫歌群といわれる一団(三三二八～三三五一)がある。前半に大宰帥大伴旅人の歌五首、後半に彼の讃酒歌十三首が重きを成している。この一連を同一の雅宴の作とする見方もあるが、⁽¹⁾確かに、これらは単なる編纂資料の違いを示しているというより、一歌群として何らかの内的な繋がりを有することは十分に考えうるであろう。

中で、「帥大伴卿歌五首」と題する五首の歌は、次のように並べられている。

(1)我が盛りまたをちめやもほとほとに寧楽の京を見ずかなりな

む (三三三一)

(2)我が命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため

(三三三二)

(3)浅茅原つばらつばらに物念へば故りにし郷し思ほゆるかも

(三三三三)

(4)忘れ草我が紐に付く香具山の故りにし里を忘れむがため

(三三四)

(5)我が行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵にあらぬ

かも (三三五)

右の五首は旅人の望郷歌とも称せられ、これまで歌中に流露する嗟歎と懐舊の情を九州遠任中の作者の境遇や想念と結び付けて論じられてきた。⁽²⁾また諸注にも個々の歌につき歌人の心中に触れる指摘が少なくない。これら先達の学恩に負いつつ、小稿は、主として讃酒歌との関連から旅人の教養を考慮に入れ五首の表現を通して作歌の趣向と作意について考えてみたい。

二 望京の憂愁

旅人歌五首の前に大宰少貳小野老の歌一首と防人司祐大伴四綱の二首が並んでいる。

青丹よし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今は盛りなり(三

二八)

やすみししわご大君の敷きませる国の中には京師し思ほゆ(三

二九)

藤波の花は盛りになりけり平城の京を思はずや君(三三〇)

旅人の帥在任中、天平元年三月四日に老が従五位上に叙せられたこと続日本記に見える。三二八はその老を迎えて開かれた宴会の席上披露されたものと見られる。そして四綱は三二九で都への思念を強く表し、続く三三〇では同席の首長帥に望京の念を問いかけた。

さて、五首の(1)は、先学の指摘通り老・四綱の歌を受けて答えたものだが、歌中望京に纏わる嗟歎と憂愁を強く吐露し、三首の流れを転じて抒情しているのである。都の咲き乱れる花のような繁栄ぶりに対し、「我が盛り」と歌うには当然自らがかつて京で朝廷に直に仕えていた華やかな時代への懐想があつたに違いない。それが再び戻りはしまいというのである。歌語「変若(をつ)」は、集中「また変若ちかへり」をちえてしかも」というふうに若返りの祈願を表象するものはあるが、反語表現をもって我が盛りの衰退を強く悲歎するのは旅人のみである。思えば、文選や初唐詩に「盛年不可再、百年忽我遄」(曹植・笠篋引)「盛年不再得、高枝難重攀」(王勃・落花落)といった詩句があり、旅人は或いは詩の表現を意識したのかもしれない。いずれにせよ、作者の教養を考えれば、(1)の初二句はそれらの詩句と同様、単に老いという事象を越えて人生の栄枯盛衰の無常観において歌つたのに違いはあるまい。

それがゆえに、歌人は盛える京へ帰れないだろうと危惧するのである。「見ずかなりなむ」ということは、「置いて去なば君が辺りは見えずかあらむ」(七八)「河浪高み瀧のうらを見ずかなりなむ」(一七二)といった類句に見るように、事実に基づく根拠があつての推量であり、現実性の高い事象への心残りまたは嘆きの表現である。換言すれば即ち、我が盛りの衰退という事実が変らぬ限り帰京

できない可能性が極めて高いことになる。ここに望京に関わる作者の切実な憂愁と不安を見ることが許されよう。

一体、羈旅作の多い万葉集中家郷を思ふ歌は少なくないが、その多くは抒情が大和・家・妹に向けられている。「国の中には都」という形でいわば政治・文化の中心としての都を思い慕う望京歌は、奈良遷都後唐風の京城制度の整備に伴う風雅の意識の高揚と相俟つて現出するもののように、小野老の歌に続く一群はその代表的な例とも言われる⁽⁴⁾。

中西進氏は老らの望京詠に触れ、その繁華極まる京師の描写と慕情は文選行旅詩に見える望京詩と類想すると指摘される。傾聴すべきであろう。因みに氏の挙げられた

滿溪望長安、河陽視京縣。白日麗飛甍、參差皆可見。餘霞散成綺、澄江靜如練。喧鳥覆春洲、雜英滿芳甸。去矣方滯淫、懷哉罷歡宴。佳期悵何許、淚下如流霰。有情知望鄉、誰能願不變。(謝玄暉・晚登三山還望京邑)

という一首の冒頭二句で、これに先立つ望京詩として次の二作を踏まえている。

西京亂無象、豺虎方遘患。復棄中國去、遠身適荆蠻。……南登霸陵岸、廻首望長安。悟彼下泉人、喟然傷心肝。(王粲・七哀詩二首・其一)

……卑高亦何常、升降在一朝。徒恨良時泰、小人道遂消。譬如野田蓬、幹流隨風飄。昔倦都邑游、今掌河朔條。登城眷南顧、凱風揚微綯。洪流何浩蕩、脩芒鬱岩嶠。誰謂晉京遠、室邇身実遼。……(潘岳・河陽縣作二首・其一)

いずれも文選に見える連作だが、王粲詩は漢末の乱に遭つて荆州

へ避難する時の作で、望京に託す作者の哀愁は詩経・曹風・下泉にかけて痛切に詠まれている。この詩の李善注は毛詩序を引いて「下泉、思治也。曹人思明王賢伯也」と言い、詩経時代不穩の世の中にあった古人の望京につけて発した治世を念う悲思が王祭詩に深く流れ込んでいることを示す。また、潘岳詩は作者が京官から地方官に遷任された時の詠であるが、詩中我が身の榮枯の常無きことを嘆き、居所は都に近いが心身とも朝廷から遠く隔てられたと歌う。そこに詩人の不遇の心境が読み取れることは勿論、時の治世を憂う点において王祭詩と一脈相通するものがある。

こうした中国望京詩の流れを文選等を熟読した旅人は当然知っていたはずである。従って、彼が老らの歌を受けむしろ望京の悲愁を強く歌いあげたことは、共に中国詩を思わせる風雅心においてそれらと繋がりがながら、その上詩人と似たような境遇にあった自らの心境を強く吐露したものとと思われる。土屋文明氏(万葉集私注)は、(1)について当時「中央では藤原一族のみが多く時めいた時代であることも念頭においてよい」といい、極めて適切な指摘というべきであろう。

そして、(1)の表現の基底に伺われる作者の心境は五首一群の基調を成すもので、続く吉野・飛鳥へと展開する抒情の指向を規定するものでなければならぬのであろう。

三 吉野を歌うことは

上代文学に於ける吉野は凡そ二つのイメージをもつ。一つは天武朝発祥の地としての離宮吉野で、人麿等の従駕作がこれにつけ、皇権の神聖性を声高に歌いあげている。今一つは吉野の神性や柘枝伝

説とも絡んで清浄な山水に寄せられた仙郷観である。これはむしろ懷風藻の漢詩に多く詠まれ、そして遊仙思想との関係から觀念上「放曠多幽趣、超然少俗塵」(丹墀廣成)「友非干祿友、賓見演霞賓」(藤原麻呂)といった俗世離れ権力離れの一面を帯びることが見い出せる。

このような吉野に関わる詩歌の相互融合、交流及び中国遊仙詩の影響などについて、すでに中西進氏の精到な論考がある。思えば、吉野詩に見る智山仁水の類型に従駕歌の離宮聖地観が関係していると同様、例えば、

皆人の命も吾も吉野の滝の床聲の常ならぬかも(九二二)

という笠金村の従駕作の反歌に見たように、吉野の山水につけて長寿不死を求めるのも神仙思想に因む仙郷観が滲透した結果であろう。⁽⁷⁾

従って、旅人は抒情の思念を都から吉野に移す時、前代からの離宮聖地と清浄な仙郷という両方のイメージが詩想にあつたに違いない。だから(2)に「昔見し象の小河に」と彼の吉野従駕作の反歌(三一六)に見る類句が用いられ、そこに従駕して吉野へ何度か行つた過去への追懐ひいては白鳳治世への追慕が込められていると見られる。同時に歌人は「我が命も常にあらぬか」と命の恒久を希い、吉野仙郷観があつての謂であらう。即ち望京に纏わる我が盛りの衰退から仙郷へ行って長生を求めることである。これは(5)において「夢のわだ瀨にはならずて淵にあらぬかも」と吉野に不変を求めるのと同じ発想である。

淵瀨の更替という表現は古今集に下ると、例えば真名序に

陛下御宇、千今九載、仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之蔭・淵、

為瀨、声、寂々閉口、砂長為巖之頰、洋々滿耳。

という風に治世に関わる世間無常を表わす典型になるが、万葉歌中似た表現は旅人以外に見当らず、僅かに人麿の近江荒都歌の反歌に「志賀の大曲浚むとも昔の人にまた逢はめやも」(三一)といい、淵に浚む水から逝く水の無常を裏返しに歌ったのと一縷の類想を見るに過ぎない。一方、漢文作品で自然地形の変動に世の無常を象徴させる表象は憶良(「悲歎俗道假命即離易去難留詩」)に「世、無恒質、所以陵谷更変、人無定期」と見える。これは周知の如くもとは小雅(十月之交)に出るものであるが、後に政治、自然を含む常なき世の象徴的表現に流用されている。また神仙譚にも

麻姑謂王方平曰、自接待以來、見東海三為桑田、向到蓬萊、水乃淺於往者略半也、豈復為陵乎(神仙伝・王方平)

という話がある。恒久なる蓬萊仙境に対し無常なる世を滄桑の変で譬えるこの物語りは上代人にもよく知られていたであろう。旅人が吉野に淵瀬の不变を希うのはそれが仙郷だからにほかならない。そして望京につけ「我が盛りまた変若ちめやも」と悲嘆し、帰京を「我が行きは久にはあらじ」と予期しながら、都を歌わず吉野仙境に永久の願いを托すそこに、作者の無常の世間を脱出しようとする心情が汲み取れよう。

窪田空穂(万葉集評訳)は、(5)につき「これは人生的の面には失望して、自然の風光に対し迷路を求めてゐた心が窺われる」と評し、鋭い洞察である。旅人は仙郷の山水に俗世を脱却し我が身を全うする道を求めるのであり、これは遊仙思想が流れ込む行旅詩とも軌を一にするものように思われるのである。

振り返れば、文選・行旅詩に

江南倦歷覽、江北曠周旋……想像岷山姿、緬邈區中綫、始信安期術、得盡養生年。(謝靈運・登江中孤嶼)

といい、長旅の遊宦に倦きた詩人は清浄な山水に接し、俗世を離れ神仙郷を求めたい思いを述べている。同詩人は別作でまた

故山日已遠、風波豈還時。迢迢万里帆、茫茫終何之。遊當羅浮行、息必廬霍期。越海陵三山、遊湘歷九嶷(初笈石頭城)

ともいい、終りのない遊宦の苦愁に名山の羅浮・廬霍に遊んでは仙境三山に登り、古賢の入水した湘水を訪らつては古聖帝の陵山九嶷を尋ねようと歌う。李善注は宋書を引いて、当時作者は致仕しようとして誣告に遭い、帝はその無実を知り罪しなかつたが、帰郷を許さず臨川内史としたという。官界の紛騒を身に滲みて知り尽した詩人は遊仙と懐古によって時の心境を表わしたのである。

してみれば、白鳳治世の聖地と仙郷吉野にかけて思う旅人の詩想も根底において、それら文選行旅詩と無縁ではなからう。そして、その思いは我が盛りの衰退と盛える都に帰れぬ憂愁と不安に深く裏打ちされていること言うを俟たないであろう。

四 故郷を思うことは

俗世離れの指向性において遊仙思想と双生児の関係にあるのは隠棲思想であり、その延長線上に田園隱遁思想がある。文選行旅詩に遊仙趣向と共に田園隱遁の意思を流露するものも少なくない。井村哲夫氏(全注巻五)は旅人の望郷詠に触れ、その「望郷の念は致仕して田園に帰るねがいであったものように思われる」といい、この意味で傾聴すべきであろう。

具体的に言えば、五首中そういった意思が汲み取れるのは(3)と見

られる。集中、「古・大和・都・家・妹」を思う歌は歸旅作に多いが、「故りにし郷し思ほゆるかも」と歌うのはこの一首のみである。それに「あさぢはらつばらつばらにもへば」という上句の音律のよさも加わって、従来高い評価を受けている。「曲曲二」と表記する二句の語意について雅澄(古義)は「その物思ふことの多くて、落る處なく委曲にしげきなり」と解し、最も詳細を尽すが、用例は集中この外一例しか見当たらない。

朝開き入江榜ぐるなる楫の音つばらつばらに吾家し思ほゆ(四〇六五)

憶良の男の作といわれるもので、下句は恐らく旅人の歌を踏襲したのであろう。思えば歌語として旅人の創造にかかるこの表現は、多分「鬱々多悲思、縣々思故郷」(魏文帝・雜詩)「眇々孤舟逝、縣々歸思紆」(陶淵明・始作鎮軍參軍經曲阿作)といった詩の表現を意図したのではなかったか。望郷の憂愁または悲思の繁きことを表わすのに「綿綿」というのは文選詩に他にも多く見られ、就中陶詩はその状態を「紆」といつている。文選注に西都賦の「步甬道以縈紆」を注して「縈紆、猶回曲也」といい、「紆曲」の二字は元来同義であることを示す。よって「曲曲」という義訓語は「綿綿」と同じことが知られる。

因みに前記の陶詩は続いて、

……我行豈不遠、登降千里餘。目倦脩塗異、心念山澤居。望雲慙高鳥、臨水愧遊魚。真想初在衿、誰謂形迹拘。聊且憑化遷、終反班生廬。

と歌い、「我が行き」の千里もの旅途に厭き、やがて「山澤の居」に帰るといふ淵明流の隱遁思想を吐露している。また同じ文選行旅

詩にある彼の別作(赴假還江陵夜行塗口)も、

……商歌非吾事、依依在耦耕。投冠旋舊墟、不為好爵榮。養真衡茅下、庶以善自名。

と、投冠して田園に隱遁する念いを述べている。

このように、長旅の遊宦の憂いから抜け出す道として遊仙と隱遁思想が歌われることは行旅詩に多く見る。大宰府歌壇の大陸の風雅を好むこと、老の歌から始まる当の歌群に文選中でも行旅詩と類想するものがあること、更には淵明詩が憶良のみならず旅人(例えば讚酒歌)にも多大な影響を及ぼしたこと等を考え合わせれば、(3)は表現上の詩との類想性もさることながら、詩想においても前述の陶詩等に通ずるものがあると見て間違いない。

ところが一方、奈良朝人にとって飛鳥の故郷は白鳳治世の古都でもあるのである。「古りにし里」という歌語は屢ば「うすら鳴く」「人も無き」によって興されるように荒涼たる景觀を内包する。それが相聞歌に用いられる時、女側の家里の古びた様子を言い、または男が家郷の荒涼たる情景を形容することもあるが、相聞歌を離れる場合、例えば田辺福麿歌集歌に、

三香の原 久邇の京師は 山高み 河の瀬清し ありよしと
人は云へども ありよしと 吾は念へど 古りにし 里にしあれば 国見れど 人も通はず 里見れば 家も荒れたり…(一〇五九)

と荒都の廢墟を表わすのに用いられている。また同じ歌語の「古郷」も古歌巻の題詞に、

和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷於寧樂宮時御輿停長屋原廻望古郷作歌

飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ(七八)

と見える。この歌は異伝があり、元來飛鳥京から藤原京へ遷都の時の持統御製が後に奈良遷都時の元明御製に取り込まれたものと考えられる。⁽¹⁰⁾ここに「古郷」が古都を指すことと共に、奈良朝人にとつての飛鳥古京の原風景があつたのではないか。だから、旅人が「香具山の古りにし里」と歌う時、古都の荒れ果てた情景もその險の裏にありありと浮びあがつたのに違いない。

とすれば、続く(4)で歌人は「忘れ草」を歌い、「古りにし里を忘れむがため」という底に、故郷に帰れぬ憂愁もさることながら、古都の荒墟化した光景のもたらす一層重苦しい悲哀が作者の胸中にのしかかつていたに違いない。なぜなら、荒都歌系譜を挙げるまでも、時代が下るにつれ、荒れた都は、

四五) 世間を常無きものと今ぞ知る平城の京都の移ろふ見れば(一〇)

と歌われる如く、世の無常を象徴する典型的風景と化したからである。それが我が盛りの衰退と相俟つて歌人の覚えた無常感を一層強力的で普遍的なものに盛り上げるのである。更に言えば、或いは旅人はそこから奈良京のやがての荒都化を予想したかも知れない。だからこそ彼は帰京を予知しながら吉野に不変を希つたのであろう。いづれにせよ、続く(5)に初見する洲瀬変更の表現が普遍的無常観の申し子であることは疑いない。

いわば、旅人は任地の異郷で不如意や失意の心境にあつた時、その漢文学教養から田園隱遁の意思を流露することはあつても、舊族大伴家の首長たる彼に政權を離れて世の栄枯盛衰と無縁のい出され

安住すべき土地は実際にはなかつたのである。故郷を思うにつけ思ふ荒都は我が身の衰退に味わつた無常感をいよよ深めるに過ぎず、それを逃れるため、結局文芸上の觀念としての仙郷を求めざるはなかつたのである。ここに吉野を詠む一首で全体を結ぶ必然性があり、そして故郷即ち古都を思う二首を含む一連の詩想が望京に端を発することは五首の流れから明日日に看取されるのである。

五 五首の連作と長屋王の變

旅人歌五首の趣向について、先述の如く作者の教養と表現の基底を通して見た。五首の詩想の流れを辿れば、歌人は連作を意図したことが分かる。構成上、老らに答える(1)に続いて、四首は(3)「思ほゆ」と(4)「忘れむ」とで一転折を成し、(5)が(2)と呼応することで漢詩的起承転結の構成を形造る。その上結句の最終音を「メ・モ・メ・モ」とし、隔首に同音を配することで詩の隔句押韻と完璧に一致するのである。因みに内容面では、(3)に見た懐舊と隱退の意思流露は(2)を受けるのだが、それが(4)の傷古に伴う無常感の深化によつてが一層強化され、(5)の仙郷隱遁の想念へと帰着するものと見られる。そして(5)の「我が行き」は(1)の望京と呼応することで、望京に纏わる盛衰の嘆きが五首の基調を成すことを示し、(1)は続く四首の序に当るといえる。

さて、このような構成と趣意を有する五首が詩想において文選行旅詩と関係することで筑紫歌壇の風雅と軌を一にすることは既にみたが、それを旅人の身の上においてみると、先に見た作者の心境は何故に起つたのだろうか。

そこで思い浮ぶのは、この作歌に先立つこと一ヶ月余り前の天平

元年二月に起きた長屋王の変である。これは周知の通り藤原四子による謀略であり、藤原氏が長屋王を執権者とする皇親政権に取って替わるという性格をもつ政変である。藤原氏と長屋主との対立の中で、旅人は王の側に立っていたと見る証拠はないが、旧族大伴家の首長として心情的には皇親政権に傾いていたことは十分に考えられるのである。白鳳以降皇親政権と吉野行幸との関係を思えば、藤原不比等政権下絶えて見られぬ吉野行幸は長屋王が議政官の班首となつた後の養老七年に二十三年ぶりに再開され、それが王の治世が白鳳への傾斜を伺わせる象徴的な表れとも言われる。神元元年暮春聖武帝登極に伴う吉野行幸に、旅人は中納言という高位の官人にしては異例の従駕歌を予作している。

み吉野の 芳野の宮は 山からし 貴くあらし 水からし 清
けくあらし 天地と 長く久しく 萬代に 変らずあらむ 行
幸の宮(三一五)

歌中「萬代不改將有」と表記されるのは、聖武即位の宣命の表現を踏えたもので、そこに天武直系の新帝に対し白鳳治世への夢を托していると考えられてしかるべきであろう。更にいえば、それは長屋王を執権者とする皇親政権への囑望でもあったはずである。

それだけに、長屋王の変は旅人にとって大きな衝撃であつたに違いない。事件後翌三月四日、都では大規模な叙位昇位が行われた。中納言任官歴も年も自分より下の藤原武智麿が大納言に進み議政官の班首となつた。天離る鄙にいた旅人はその報を聞かされたのみであつた。目の前で同じ三月四日に、従五位下から従五位上に昇位した老が都の盛況を華やかに歌い上げている。下僚老の気持が分からないでもないが、それにつられて我が身を振り返る時、旅人は寂寥感

を禁じえなかつたのであろう。それに権力の頂点に立つ長屋王が一旦にして失脚し自尽させられたことは、何よりも人間または世の中の栄枯盛衰の無常をまざまざと示しつけたのではないか。ゆえに政治の中核にいた旅人は自身への不安も拭いきれないものがあつたに違いないあるまい。

してみると、五首に見る望京の悲愁と不安と懐旧に裏打ちされる深い無常感は、正に白鳳再現の夢をもたらしした王の皇親政権の失墜によつて惹起された歌人の心境ではなからうか。そして吉野に不変を祈うのは、吉野讚歌で歌つたのと同じ気持の流露であるが、それが叶えられぬ時、旅人はもはや仙郷の山水への逃避に自らの心情を托すほかなかつたのであろう。

六 おわりに

以上、五首において旅人が長屋王の変に遭遇した時の心境を吐露していることをみた。この直後、旅人は讚酒歌十三首を作り、なかなか人にとあらずは酒壺になりてしかも酒に染みなむ(三四四)

世間の遊びの道に冷しくは醉哭きするにあるべくあるらし(三四七)

といった憤世と失意と自棄の心情を一層激越な口調で歌いあげている。そこに映し出される作者の飲酒に逃避しようとする姿勢は、五首に見るそれと根底において相通じること、言うを俟たない。ここに巻三雑歌部に収められた筑紫歌群なかでも旅人の二連作の内的繋がりを見ることができるのである。

もっとも、望京歌でも讚酒歌でも旅人はその漢文学教養を發揮し

つつ作歌している。それは、述志の伝統をもつ中国文学に詩賦の作者が時政に敏感に反応するものが多いことにもよるが、同時に、それは筑紫歌壇の風流であり、また時代の好尚でもあった。そのため作歌から歌人の時の心境を伺い知ることができるが、これを直ちに旅人の政治姿勢と同一視することは躊躇われるのである。あれから半年ほど経った同年十月に、旅人は藤原房前に倭琴一面と書簡に添える歌二首（八一〇〜一）を贈った。それが上京請託と見られるのももつともであろう。そして翌二年正月に大宰府で開かれた盛大な梅花宴に付して、旅人は、

雲に飛ぶ葉はむよは都見ばいやしき吾が身また変若ちぬべし
（八四八）

と歌い、仙葉よりむしろ京師に「変若」の望みを繋げている。大和の旧豪族の氏上としてやはり朝廷を離れてはならないのである。しかし、長屋王の変をきっかけに政権が藤原氏の掌中に帰したことは変わりがない。この年の末旅人は大納言に昇進し帰京したが、半年後亡くなる前の「在寧業家思故郷歌」では、

須臾も行き見てしか神名火の淵は淺びて瀬にかなるらむ（九六九）

と歌い、淵瀬の変に寄する無常感に既に一種の諦念となつて静かに流れているのである。

注

- (1) 伊藤博「古代の歌壇」(『万葉集の表現と方法』下)
- (2) 例えば、益田勝美「鄙に放たれた貴族」(『火山列島の思想』)は、旅人の望郷歌を「望郷がなじんだ土地への懐旧を超えて(生命の若き日)への懐旧となる」とし、その望郷の情に「都誇り」(『鄙度視』)

の思想に拠って立ちながら鄙に生きねばならぬ地方官僚貴族の苦悩の影が見られると説く。

(3) 林田正男「小野朝臣老論」(『万葉集筑紫歌群の研究』)は、老の歌を天平元年三・四月の作とし、それに従う。

(4) 猶、小野老の三二八番歌について、北山茂夫氏(『万葉の世紀』)は「この歌は、七三六年(天平八)遣新羅使が途上で都をこいたの白詠した「古歌」のひとつ、あをによし奈良の都にたなびける天の白雲見れど飽かぬかも(巻一五)」をふまえたもの」と指摘する。これも奈良遷都後の作で、しかも遣外使達によって誦詠されたことは、望京歌の系譜を考えるうえで参考になる。

(5) 「梅花の宴群像」(『万葉集の比較文学的研究』)

(6) 「清き河内——吉野歌の問題(同注5)」

(7) 人麿従駕作の反歌に「見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む」(三七)とあるが、それは土地讚め官讚めの類型に則るもので、そこから対句側の長寿を希う発想は生まれにくいと考えられる。

(8) 拙稿「古今集」兩序与中国詩文論(『現代意識与民族文化』復旦大学出版社)は、真名序のこの部分は中國詩文論中政治の興廢と詩文の關係を述べるものに等しい、と指摘している。

(9) 文選・任彦昇「爲范始興作立太宰碑表」に「藏諸名山、則陵谷遷實」とあり、晋書杜預伝に「預好爲後世名、常言高岸爲谷、深谷爲陵、刻石爲二碑、紀其勲績、一沈萬山之下、一立岷山之上、曰、焉知此後不爲陵谷乎」などがある。

(10) 『萬葉集全注』卷第一(伊藤博氏担当)

(11) 金井清一「旅人・憶良の時代」(別冊国文学『万葉集必携』79春季号)

(12) 清水克彦「旅人の宮廷儀礼歌」(『万葉』三七、昭35・10)

(13) 大浜殿比古「歌人誕生」(旅人覚書その一)(『山の辺の道』一〇、昭39・1)

(14) 拙稿「大宰帥大伴卿讀酒歌十三首」考(『藝文研究』五十六号、平成元・12)

補注

五首中、三三五番歌の結句について誤字説に基づき異訓が行われている

が、小稿は、古典大系本等に見る非誤字訓説に従った。

なお、五首中の四首構成についても少し補説すれば、「吉野・飛鳥・飛鳥・吉野」という配置は確かに渡瀬昌忠氏（人麻呂に於ける贈答歌）『美夫君志』昭45・12の指摘する「波紋型対応」に似て居る。一方、人麿の安騎野従狐歌短歌四首（四六～四九）に起承転結の構成が認められること古くから指摘され、しかも結句の最終音が「ニ・シ・ス・フ」と二首ずつ同韻になっている。これは別稿（注14）に同じ）で詳述した讃酒歌の同音転換構成と近似する。当面の四首の構成を考えるのに参考となるのはもう一つ、梅花宴に旅人が後に追和する四首（八四九～五二）がある。

残りたる雪に交れる梅の花早く散りそ雪は消ぬとも

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも

わが宿に盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも

梅の花夢に語らく風流たる花と吾念ふ酒に浮べこそ

右の四首は梅の開花から彫落までの順を追って詠まれている。盛りから散りへの転換は第三首において行われたが、表現上第三首は第二首と対応する。同じことは讃酒歌十三首中反歌に当る最後四首についても言えるのである。おそらく、旅人は四首構成に波紋型対応と起承転結とを意識的に融合したのだろうとも考えられる。そして追和四首の結句最終音がすべて同韻であることもただの偶然ではあるまい。

時代が下ると、藤原濱成が『歌経標式』で頻りに短歌の韻をいう。それはただの詩論の模倣というより、固定化した短歌様式に一定の格式を見い出そうとする努力でもあったのだろう。長歌から短歌への転換期において、似たような試みは旅人も短歌連作に対して行ったのではないか。彼は詩人でもあったからである。

〔付記〕

本稿は、昭和六十三年度に提出した修士論文の一部を加筆したものである。爾後も常時御指導、御教示を賜っている井口樹生先生に深く御礼を申しあげる。

(こしこう)